

偶然の悲劇

トマス・マロリー『アーサーの死』における unhappy とジョン・リドゲイト

不破有理

サー・トマス・マロリー(Sir Thomas Malory)は『アーサーの死』(*Morte Darthur*、一四八五年刊)において、栄華を誇ったアーサー王の円卓がさまざまな要因が重なり瓦解していく様を見事に描いている。中世以来、「アーサーの死」と題した作品が数多く生まれていることから、アーサー王文学において「いかにしてアーサー王は死に至るのか、どのように円卓の騎士団が崩壊していくのか」というテーマがいかに高い関心を集めていたかが伺えるであろう。マロリーの作品で円卓崩壊の過程がとりわけ鮮明に描かれているのはカクストン版の二十巻と二十一巻にあたる結末部分だが、この箇所に“unhappy”という表現が頻出する。本稿ではまず、中英語では単に「不幸な」という意味に限らないこの言葉をマロリーがどのように用いているのかを典拠との比較を通じて分析する。その上で、これまで

マロリーの典拠としてほとんど言及されることのなかったジョン・リドゲイト(John Lydgate)の作品、とりわけ『王侯の没落』(*The Fall of Princes*, 1432-38年)と『トロイの書』(*Troy Book*, 1412-20年)が何らかの形でマロリーの執筆過程に影響を与えた可能性があることを示唆したい。¹

マロリーの作品では三十一箇所“unhappy”という表現が用いられているが、最初の事例はベイリンとベイラン兄弟の逸話にみられる。ベイリンが城の騎士と戦わねばならない慣わしに対して“unhappyな習慣だ”と述べているが、フランス版では“unhappy”に該当する箇所に“malvaïse”や“villaine”、つまり「不運な」や「邪な」という意味の言葉が用いられている。² 中英語辞典(以下MEDと省略)によれば、“unhappy”が「習慣」の語と結びつくと「邪な」の意味になることから、この箇所に限れば、

単純にフランス語の置き換えと理解できるかもしれない。³
だが次の用例では異なる解釈が必要となる。

「みんな城にいた不吉な騎士がやったことだ。私に盾を置いていくように仕向け、我々二人が減ぶことになってしまった。もし命存えるのならあのような悪習を持つ城など、たたき壊してやるものを。」⁴

通常、盾の紋章によって互いを認識し戦いを避けることができたはずでありながら、ベイリンは城の騎士の勧めで別の盾を携えた結果、兄弟相打ちという悲劇にいたる。盾を取り替えるようにと助言した騎士が *unhappy knight* である。ヴィナーヴァーは「この表現はこの騎士の状況、性格、感情を説明しているのではなく、この騎士の行為が招いたさまざまな結果を指し示している」(32)と注を付している。つまり、*unhappy* は形容する個人、事物の一過性の事象を形容するだけではなく、その人、事物の行為がきっかけとなり、さらに深刻な事態を引き起こす一連の流れを示す言葉として理解できる。この「不幸な騎士」が盾を交換するように勧めたのは故意の悪意によるものではなく、その騎士が、またベイリン自身も予想しなかった兄弟殺しという結果になる。さらにベイリンがベイランを死に至らしめる一撃を与えた剣を「不吉な剣」(*unhappy sword*, 94)と呼んでおり、これは MED によれば、「禍や不運をもたらす、災難をもたらすような、破壊を招く」と定義されていることから、*unhappy* には現代英語で考える以上に強い意味含まれて

いることになる。ベイリンが振るう刀は兄弟を殺めるという「破滅的」結果を招くが、さらに注目したいのは二人が息を引き取ったあと、マーリンが現れ、刀の柄に次のような碑文を刻むエピソードが添えられている点である。

「この世で最も優れた騎士でないとこの剣は扱えないのだ。それはサー・ランスロットか、または息子のガラハッドのことだ。そしてランスロットはこの剣で最愛の男を殺すことになるであろう。それは、サー・ガウェインだ。」そしてこうしたすべてを剣の柄に記させた。(96-97頁:91)。⁵

この剣によってランスロットがガウェインの死を招くのは円卓の崩壊が決定的な場面であることは周知のとおりである。この碑文によって、*unhappy* な刀が兄弟殺しのみならず、アーサー王の円卓の崩壊という、より大きな破壊に関連づけられていることがわかる。「不運な剣」は当初の予想をはるかに凌ぐ深刻な事態を招くことをマロリーは *unhappy* という語によって示唆しているようだ。ちなみに、マロリーの典拠に *unhappy sword* はない。つまり、この場面で *unhappy* という語を選択したのはマロリー自身である可能性が高いといえるであろう。

unhappy の語はランスロットが結婚観を語る場面でも何度か用いられている。結婚は騎士としての務めを全うできなくなるので自分は結婚しない。愛人を持つことも避ける。というのも愛人を持つことは戦いにおいて *happy* ではありえない、と述べるくだりで、ランスロットはさらにことばを続ける。

そうなれば、戦いに際して運に見放され、惨めな状態になるであろう。あるいは自分よりも卑しい騎士に負かされたり、そうでなければ自分の邪悪さによって不運にも自分よりも立派な騎士を殺してしまうだろう。だから愛人を持つ者は誰でも不幸になるし、万事うまくいかなくなるのだ。(260-261頁; 270-271)。⁶

ランスロットが示したこの定義に従えば、unhappyとは自分より弱い騎士に戦いでなぜか負けてしまったり、自分より強い騎士を偶然打ち負かしてしまうことである。すなわち、通常の戦いであれば起こりえない、あるいは起こってはならないような事態が引き起こされた際に unhappy という表現をあてはめていることに気づく。「ランスロットのエピソードの中でマロリーが行った最も重要な追加」と評されている場面で、つまりマロリーの独自性が読み取れる箇所には unhappy という語が頻出していることがわかる。⁷

同じ用法がガレスの逸話でも多用されている。ガレスが台所の小間使いとして次々と騎士を倒すと、その都度リネットが「不運な小間使いめ」(unhappy knave)と罵り、unhappinessによって unhappy に倒したのだ、と断じる。この文脈においても、まさに前の引用で触れたランスロットの unhappy の定義と見事に合致しているといえるだろう。すなわち、ガレスの本当の血筋を知らないリネットにとって、台所で働く小間使いが身分違いの相手を倒すのは、不運な偶然(unhappiness)を利用し

ているとしか考えられない。ランスロットが定義した unhappy knight に期せずしてガレスは該当することになる。この偶然によって相手を倒し、倒されるという図式は、アーサー王の宮廷の時間では遙か先に、またはるかに悲劇性を加味して再現されることとなる。

円卓の瓦解に加速がつく事件、すなわちランスロットがギネヴィアを火刑から救い出す際に誤ってガレスとガハリスを殺めてしまう、その状況は次のように報告されている、「ガレスとガハリスの二人は鎧をつけておらず、ランスロットが二人であるとは知らずに撃ってしまったので、二人は不運にも(unhappy)殺されてしまったのです」⁸。さらに、ランスロット自身が、「ガレスとは知らずに殺害してしまった、鎧もつけずにいたとはなんと不運な日だ」と嘆く箇所にも unhappy の語が重ねて用いられている。unhappy は MED に「間違っ」という意味もあるので、「誤って殺してしまった」とすることももちろん可能だが、むしろ MED の最初に挙げられている「不運にも」殺してしまったという意味で解釈すること、unhappy の原義との連想から、以降の不運の連鎖を示唆する意味合いを共鳴させているように思われる。

このように、中英語「unhappy」の語は現代英語の意味をはるかに超えて多様な意味を包含している。人に対して用いられる場合、単に「不幸な」という意味のほか、他者に「災難を引き起こす」意味合いがある。事物や場所、行為と結びつく「破

壊を引き起こす」「不運な」といった意味があり、「不運、不幸な出来事、不運な偶発」の *unhap* や *misshap* などの語と密接に関連していることがわかる。現代の用法の表層からみえない語義、「偶然、偶発」によって招かれる事態を総称する言葉としての意味合いが強いと推察できるのではないだろうか。

「偶然性」をあらわす典型的なエピソードとして、アーサーとモードレッドが最後の戦いを回避すべく休戦調停をした直後蛇が現れる場面が想起されるであろう。蛇を殺そうと抜いた刃が誤解を招き、双方の意に反して一気に王国破壊の戦いへ向かう。この挿話は『八行連詩アーサーの死』(*Stanzaic Mortre Arthur*) からマロリーが援用したと考えられている。『八行連詩アーサーの死』では「休戦協定が結ばれるはずであったときに」と仮定法が用いられており、その仮定を崩すように蛇が突然現れる。⁹そこには「もし休戦が成立していれば最後の決戦は行われなかった、円卓の崩壊は免れた」といういわば「歴史の中のⅢ」が存在する。おそらくマロリーはこの文意を汲み取り、仮定法ではなく、休戦協定は「同意して」(*agreed*)と「合意した」(*accord*)と言葉を重ね、「完全に」(*thoroughly*)という言葉まで加え、協定がいったん結ばれたことを強調している。さらに休戦合意の証としてワインを酌み交わしたとまで記されていることから、これでランスロットの援軍を待てば、アーサー王は最悪の事態も免れることができたはずと誰もが予想する。マロリーがこのように状況を描きこんでいるがゆえに、休戦が合

意されたにもかかわらず、なぜ蛇が現れ、最後の戦いになだれ込んでしまったのか、という思いが読者には強く残るのである。『八行連詩』には蛇のエピソードがあるが、その後アーサーとモードレッドの両軍に別れ戦闘になだれ込む際、マロリーのアーサーが上げる悲痛な叫び、「ああ、なんとという不運な日だ」(*Alas, this unhappy day!*)は、ない。¹⁰

それではマロリーの別の典拠フランス版『アーサーの死』(*Mort Artu*)では蛇が現れるのであろうか。フランス版に見られる蛇への言及はモードレッドの謀反を知って叫ぶアーサーの言葉、「ああ、モードレッド、おまえこそはかつて余の腹より出て余の領土を焼き、余に立ち向かってきた蛇であることを、お前は余に知らせてくれるのだな」にみられる。¹¹この叫びに蛇への言及がありはするが、和平交渉のエピソードそのものがフランス版にはなく、ゆえに、交渉の決裂が突発的な蛇の出現によってもたらされるという筋立てにはなっていない。フランス版ではアーサー王と姉の近親相姦の結果生まれたモードレッドを、体内から出現した蛇に同一視することによって、近親相姦の代価として、いわば因果応報としてモードレッドの反乱を受けとめている。このような王国崩落の原因に対して、マロリーは明らかに異なる展開を選択している。『八行連詩』の展開に準拠しながらも、*unhappy* という嘆きのことをアーサーに与え、さらに *unhappy* という語を円卓崩壊の場面場面であたみかけるのである。

死体が累々と連なる戦場でモードレッドがひとりたたずむ姿をみつけ、アーサー王が「このような機会はまたとない」とルーカンに槍を渡せと迫る場面がある。ルーカンは「今は見逃したほうがよい、なぜなら彼は『unhappy』だから」とアーサーを諫めるが、これはひとりである相手を討ち取るのではモードレッドが惨めだというのはなく、アーサーの王国にこのような悲劇をもたらし、「災難破滅を引き起こす忌むべき存在」であるから、この「惨禍をもたらす運命の日」(unhappy day)には彼を避けよ、と解釈できる。¹² 結果的にアーサーの円卓崩壊は、蛇が騎士の足を咬むという「不幸な偶然」(unhap)が引き金となり、unhappy day となってしまう戦いの日に unhappy knight であるモードレッドによって、アーサーが unhappy を理解せずルーカンの警告を無視したアーサーの判断によって最終的にもたらされることになる。あるいは、モードレッドは近親相姦によって生まれたがゆえに unhappy であり、これは中英語で定義される“III-Fated”「災難を引き起こす運命」の刻印を押されていると考えられるかもしれない。とはいえ、モードレッドひとりによって円卓が崩壊するわけではなく、マロリーはunhapの連続として王国が崩壊していく状況を unhappy という表現に込めたのではないだろうか。『八行連詩』は「必然の成り行きの悲劇」と評されているので、マロリーは結末に向かったなだれ込む緊迫感を『八行連詩』に依拠しているともいえる。¹³ ただし『八行連詩』に unhappy の語はない。unhappy とは、単

なる不運によって引き起こされた状態を称するのではなく、時には人間の意志では抗したい事態を招く存在・人物を評して用いる表現のようにも思える。これが作品後半に登場する事はマロリーの「悲劇観」を理解する鍵となるのではないだろうか。unhappy という語はマロリーが典拠としたフランス本には不運を示す表現はあるものの、「偶発性」を示すような表現はほとんどない。またマロリーの結末部分の典拠と考えられている『八行連詩アーサーの死』にも unhappy という表現がないことは指摘したとおりである。それではマロリーはどこからこの表現をえたのだろうか。もちろん、直接の典拠を探す作業は不毛に終わる可能性もある。マロリーが生きた十五世紀のことば文化の中で使用されていた不特定多数の語彙のひとつであると捉えることも可能であろう。¹⁴ その前提を考慮しながらもなおMEDに引用されている例から判断すると、ジョン・リドゲイトの『王侯の没落』と『トロイの書』からの用例が多いことに注目したい。

『トロイの書』は一国の滅亡記で、英雄の活躍と破滅を描いている。リドゲイトは往々にして陳腐、冗長、亜流などのレッテルが貼られがちではあるが、ピアソルも認めているように、『トロイの書』は作品の最後に近づくにつれ、すなわち栄華を極めた古のトロイの国が、プリアモス王、ヘクトル、パリスなど錚々たる勇士たちが一人ずつ倒れ、滅びゆく局面になると、リドゲイトが得意とする栄枯盛衰、盛者必衰のむなしさが力強

い文体とともに、読む者に訴えかける。¹⁵『王侯の没落』は榮華を誇ったものでさえ滅びるのだという人の世の移ろいやすさに重みをおく場合が多いのに対して、『トロイの書』ではトロイの滅亡をいとおしむ気持ち、「なぜ、この場面でプリアモス王はギリシア軍と戦おうなどと決断したのであるか、なぜ、ヘクトルは盾を身から離れたのであろうか」など、歴史上の「もし」、これがなければ世の流れは変わっていたのではないか、という自問に近い、失われたトロイの人々への惜別の念が込められ、それゆえに読む者の心にもより強く響きかけるように思える。unhappy という語はまさにこのような「なぜ、このときにこのようなことが起こるのか」という気持ちを吐露する際にリドゲイトが用いている。

たとえば、プリアモス王がギリシアとの開戦を決意するに場面では、決断に至る経緯を議会形式で語らせることによって、漸層的な効果が生まれている。まず騎士道の華と称されるヘクトルは反対を表明し、それに対しバリスは自分が見た夢をもとにギリシア出兵を主張する。次に、ギリシアへ出陣するとトロイは滅亡するという託宣をもとにヘレヌスが警告し、いったん開戦回避の方向に論が傾く。にもかかわらず、トロイラスの開戦論によって突如、開戦が決定する。右往左往した議論が、それまでの妥当な意見とは相反する方向の結論に向かってしまうとき、最後の結末を知る読者にとっては開戦の決断はトロイの終焉を意味するだけに、カッサンドラの予言とともに暗澹たる

印象が残る。プリアモスが戦を決意する場面をリドゲイトは「物事の順序は運命と固く結びつけられているので、事態の発生を妨げようとしても発生を防ぐことは不可避である。パリスが発案すると無分別にも決めてしまい、不幸にも事態が動き出す流れに身を任せてしまったのだ」と語る。この説明の意味するところは次に続く「不運にも偶発的な出来事に巻き込まれたのだ」(unhappily with hap they were envolyd, Book II, 3223行)という言葉でさらに深められている。hap は語彙解説によると、「もろもろの出来事の原因や方向を決するようなきっかけや運」¹⁶であり、大きな破滅へ向かう流れの中で、「偶発的出来事」(hap)に「不運にも」(unhappily)が結び付けられ、解き放つことができない、つまり、破滅に至る方向性を変更できないと解することができらるだろう。言い換えれば、滅亡そのものを避けることができない、という決定に関する単一性の事項ではなく、滅亡に向かう一連の行為に歯止めをかけることができない、という意味合いではないかと思われる。

トロイの民が unhappy な決断をしたことにより、「運命の女神が引き起こす災いの連鎖の勢いによって、不安定な運命の車輪は一気に回転し、トロイの民を混乱・破滅へと早めたのであった」(Book II, 3286-3291行)と述べる。さらに、リドゲイトの嘆きは続き、トロイの人々がヘクトル、ヘレヌス、ペンテウスやカッサンドラの警告に耳を傾ければ、トロイも破滅から守れたのにと破滅を食い止められなかった口惜しさを吐露する。

取り返しがつかないことへの無念さ、無常さはマロリーの最後の章にも通底しているといえる。そしてその無念さをあらわす表現として「不運なきっかけ」(unhappy chance)ということばが登場しているのである。リドゲイトにおいて、「不運、不幸な」(unhappy)という意味の言葉と「偶然、きっかけ」(chance)という語が組み合わされることによって、またさらに unhappy の語自体に含まれる運不運も Fortune によって左右されるという「運」「偶然性」の意味合いが重層化され、マロリーの作品の悲劇性を増幅させる効果が unhappy の用法に踏襲されているのではないか。

円卓の崩壊の場合もそうであるように、トロイの滅亡の原因もさまざまな要因が絡まり、出来事の岐路に unhappy の語が現れる。リドゲイトの嘆きが大きいのは運命の女ヘレナとパリスの出会い、ヘクトルの死、トロイの城壁にギリシア軍から、いわゆるトロイの木馬が運び込まれることを許したこと、トロイ軍の中から裏切り者が出たこと、トロイの守護像が盗まれたこと、アキレスがヘクトルとトロイラスを殺害したこと、などが挙げられる。偶然にもヘレナがパリスのいる神殿に出かけ、二人が出会った様をリドゲイトは「不運な偶然」(unhappy chance)と呼び、その結果この運命的な出会いがギリシア軍、トロイ軍双方になんとか甚大な被害を与えたことか、と嘆いている。さらに、そのような破滅を引き起こしたヘレナを「不幸をよぶ女」(unhappy woman)とリドゲイトが評するのは、マロリーがモー

ドレッドを「不幸をおこす騎士」(unhappy knight)と呼ぶ用法と同義といえる。ヘクトルが戦死する場面にいる描写も対応関係を認めることができる。ちょうど円卓最後の決戦前夜、アーサー王が不吉な夢をみた直後、ガウェインの亡霊が現れ警告したように、ヘクトルの妻も不吉な夢におびえ、今日ばかりは戦ってくれるな、と懇願する。にもかかわらず、ヘクトルをとめることは不可能である。リドゲイトは語る、「彼の不運(unhap)は途絶えることのない破滅となった」。(His unhap were endles nyne, Book III, 5099行)。ヘクトルの死をめぐる状況も偶然が取り巻いている。ヘクトルは「運か、偶然か」(533行)立派な武器を身に着けたギリシア軍の王に出会い、まぶしく輝く宝石に目を奪われ、そのギリシア軍王を殺害し、宝石を奪おうとする。騎士道の鏡であるヘクトルがなんとという恥知らずなことをするのか、物欲は身の破滅なり、とリドゲイトが嘆くように、貪欲に目が眩み、身を守るはずの盾を身体から離れた瞬間にアキレスの投げた槍がヘクトルの心臓を射抜き、突然、予想もしない死を与える。

先に言及した「彼の unhap は途絶えることのない破滅となった」という言葉通り、トロイ随一の騎士を失うことによってトロイは確実に、終わりのなき破滅の道を進むことになる。二ヶ月間の停戦の後、第二のヘクトルと称えられたトロイラスも復讐心の強いアキレスによって殺害される。さらに、身内の離反、裏切り、内紛によって弱体化していたトロイに木馬が、¹⁷ 城壁

内へ運び込まれる場面も unhappy chance という句が用いられている。不落の城であったトロイを自らの手によって城壁を壊すことに加え、ギリシア軍の計略に乗せられ馬を無防備な岩の中に招き入れた結果、最終的にトロイ人の滅亡が引き起こされることになる。このように、十五世紀に unhappy という語が孕んであるう響きを読み込むことによって生まれる作品の重層性が、結末へ収斂する緊迫感を際立たせているように思われる。アーサー王の円卓の栄枯盛衰を描いたマロリーにとって、happy ということばはそのような緊迫感を語るために十分訴えかける力のある言葉であったのではないか。

リドゲイトの作品は、フランスの『アーサーの死』や『頭韻詩アーサーの死』、『八行連詩アーサーの死』のように、物語の具体的な挿話、表現などに直接影響関係を見て取れるような典拠の類ではない。しかし、先に指摘したように、作品の流れ上、重要な局面で発せられる unhappy という語の用法は、リドゲイトとマロリーの使い方においてきわめて近似している。それではマロリーがリドゲイトの作品にあれた可能性を示す外的な論拠はあるのだろうか。マロリーは作品を執筆したといわれる一四六九年に、ニューゲイトの監獄にいたことが検証されている。¹⁸ 拘束状態にあったこの時期に閲覧可能であった文献の候補として、ニューゲイトの近くにあったグレイ・フライアーズ修道院の蔵書が挙げられる。蔵書目録によれば、一四四〇年に

捕虜となっていたシャルル・ドレアンが『王侯の没落』の写本を借りたという。¹⁹ マロリーが拘束されていた間にリドゲイトの作品を手にした可能性もありうるが、これは推定の域を出まい。だが仮にこの時期に接していなかったとしても、マロリーが執筆以前に『王侯の没落』を手にしていただ可能性はきわめて高い、とする論がある。ジョン・ウィズリングトンの論である。²⁰

ウィズリングトンはマロリーの作品最後に記されたアーサー王の墓碑文である「かつての王であり、未来の王でもあるアーサー王」という表現を比較検討し、いくつかの異文が十五世紀までには広く口承でも流布していたが、もし文字媒体でマロリーが目にしたとすれば、それは写本に記された文言と完全に一致するリドゲイトの『王侯の没落』を通してではないか、と結論している。この論が即マロリーが『王侯の没落』を読んだことを証左するものではないかもしれないが、両者の影響関係の可能性を濃厚に示唆する指摘であるといえる。

『王侯の没落』は「中世後期のイングランドにおいてきわめて重要かつ影響力のあった作品でありながら、これほど正当に評価されていない作品はない」といわれている。²¹ この作品を含む写本は七十以上も現存することから、十五世紀においてきわめて広範囲の読者を得た作品であったことは間違いなく、その広範な読者の一人がマロリーであったとしてもおかしくはない。しかしながらリドゲイトの作品とマロリーとの影響関係に言及

した論考はきわめて稀で、リドゲイト研究の先達デレック・ピアソルやラウイス・A・エイビンらもその著書においてマロリーへの影響を論述していない。両者の関係を論じた数少ない論考にはウィズリントンのもののほかに、マロリーがリドゲイトの詩作品に触れた痕跡を指摘する論がある。²² リドゲイトの短詩「*この世のなぐわし*」“The Dysposicion of the World”では夏から冬への季節の移り変わりを人情の移ろいやすさに重ね合わせているが、これはマロリーが『アーサーの死』の十八巻二十五章で人の情のはかなさを述べるくだりに呼応する。「冬の身を切るような冷たさ (rasure) がいつも緑の夏を削ぎ取り消し去ってしまうように、男女の愛もまた変わりやすい」(四五五頁改訳)と、リドゲイトの詩行「冬の身を切るような冷たさ (rasure) が、喜ばしい様子で花咲く夏の心地よい居場所をすべて消し去ってしまう／この世のあらゆるものは突然過ぎ行き、この世に終の住処はない」は表現も主題もきわめて近いことは明白である。さらに「冬の身を切るような冷たさ」“rasure”はこの箇所以外でマロリーに用例がないことも特筆すべきであろう。²³ マロリーが必ずしもアーサー王物語とは限らない文献からも表現や発想を得ていたことが推定できる。

それではアーサー王物語ではない『トロイの書』をマロリーが参照した外的論拠はあるのだろうか。ただひとつ確実なことは、トロイの没落譚の主題をアーサー王物語の枠組みにしようという着想は当時、十分理解できる文学的な飛躍であったこと

である。そもそもブリテン島はトロイの末裔ブルータスが到来して創建したという始祖伝説が根強く存在している。マロリーが典拠とした『頭韻詩』や『八行連詩』のアーサー王作品にもトロイへの言及があり、とりわけ『頭韻詩』ではヘクトルへも何度か言及し、アーサー王はブリアムス王の息子ヘクトルの血の流れを汲む者と作品の最後で語っている。また『トロイの書』の執筆を依頼したヘンリー五世は、自分が王位を継ぐことが明らかになった時点でリドゲイトに執筆を依頼したといわれている。²⁴ つまりトロイからの歴史を語ることが、アーサー王の「歴史」を語ることと同じく、当時の王位継承権の正当性を主張するひとつの準備であり、道具としてみなされていたのである。リドゲイトに先駆けてトロイ関連の英訳が二作品残存しており、さらにリドゲイト以降ではマロリーの『アーサーの死』を手がけたカクストンが一四七四年頃にフランスのトロイ本を翻訳印刷している。十五世紀は一種のトロイ・ブームであったといつてよい。²⁵

マロリーは書き始めからかなりの知識を持っていたと考えられ、²⁶ ケネディの指摘のようにマロリーがアーサーの王国の栄華と没落を描く構想を当初から抱いていたとすると『トロイの書』こそ、その着想をあたえるのにふさわしい文献ではなかったか。ヘレン・クーパーによれば、十五世紀に韻文ではなく散文を選択することは結末が惨禍となるジャンル、「災難に終わ

る騎士道物語」(disaster romances)」とクーパーが呼ぶ範疇を選択することを意味したという。²⁷ そうだとすれば、マロリーはアーサーの円卓の崩壊という災難を視野に入れた作品を創作したことになる。そうであればなおさら、unhappy という語によって「偶然の出来事の連鎖」が最終的な悲劇にいたるであろうことを暗示できたのではないか。「些細なことが大事を引き起こす」過程を念入りに描いたのはリドゲイトが『トロイの書』で採用した手法である。²⁸

『アーサーの死』において、作中人物や読み手をも突き動かしているのは神なのか、運命なのか明らかではない。運命を異教的な存在と捉えることは可能であろう。中世において『王侯の没落』は運命の女神への言及が頻繁に見られる書としてよく知られていた。異教の偉人たちがどのように繁栄の極みから没落へ至ったのかという、あくまで「異教の時代」に重点をおいているために、運命の女神が人の不幸を牛耳る設定に違和感を持たずに済んだのであろう。しかし中世キリスト教においては、なにより全知全能の神が存在する以上、人の運命を操る別の存在があることは居心地が悪い。中世キリスト教教会は「運命の女神」の領分を制限していく作業になる。中世キリスト教父たちの解釈によれば、運命は神に従属する存在であり、かつまた神意を実現させる代理人としての役割を付与される。²⁹ しかしマロリーの作品では人間の行為と行為が招く結果を全能の神が支配しているという考えだけでは説明できない不透明

領域が存在する。諸々の偶然の出来事が物語の動きを支配し、偶然の出来事によって突き動かされる状況は悲劇の序奏から明らかに見て取れるのである。unhappy の語のみならず、unhappy の類似語である mishap や misfortune, befall などの表現が最後に向かつてより多く用いられている。毒リンゴが「たまたま」ギネヴィアが催した宴で供され円卓内の陰謀が明らかになり、ボーズ卿がランスロットのわき腹を槍で突き刺したのも「不運な偶然」であり、さらにランスロットが女獵師に馬に坐れなくなるような身体部位に「不運にも」矢を射られ、この世で最も「不幸せな」男だと嘆き、最高の栄誉を得ようという時に「予期しない不幸」が降りかかる。この際に用いられる表現は unhappy である。たまたまの行為がさらに新たな状況を作り上げるのはリドゲイトの『トロイの書』によくみられる手法である。『王侯の没落』の原典として遡及できるボッカチオの *De Casibus Virorum Illustrium* が「悲劇」を語ることを与えたとするなら、*De Casibus* の伝統を受け継ぐリドゲイトへと悲劇の語りが継承されているとも考えられる。³⁰ マロリーの結末について、異教とキリスト教的なものの並存によってさらに悲壮感が膨らんでいるとの指摘もあるが、³¹ 偶然の悲劇を異教的なものと呼ぶのであれば本論の意図するところと一致するといえるかもしれない。あるいは、この悲劇の語りをマロリーはリドゲイトから得たのではないかとすれば、トロイという一国の栄華とその崩壊を描いた『トロイの書』に負う所は単に字句の影響関係以上

に大きいことを示す証左に他ならないと思えるのである。

アーサー文学の長年の吸引力のひとつが「いかにアーサーの死を描くか」という視点であり、この点をどのように敷衍されるかが読者にとって重要であり、かつ関心が高かったといつてよい。これはいかにアーサーの死を招く事態が引き起こされたのか、という問いに換言することもできる。この問いに答えるべく、アーサーの近親相姦とモードレッドの誕生、あるいは王妃ギネヴィアとランスロットの不義、あるいはこれに端を発して円卓の騎士内の不和、ガウェイン一族とランスロット一族の確執と決裂が生んだ内紛、弟を殺害されたガウェインの復讐心、これらはすべて個々人の責任と咎が円卓崩壊の原因を作っていると考えられだろう。確かにヴィナーヴァはフランスの原典と比較すると格段に運命の支配力が低く、マロリーは人間悲劇のドラマに仕立て上げたと述べている。³² しかし、王国の崩壊が決定的となっていく過程に介在するのは、人間が抗しがたい「運命の気紛れ」に近い「偶然」である。人間の力を超えた「偶然」の存在によつて否応ない没落と破壊へ向かわざるを得ない状況を加味することによって、ない交ぜとなって蠢く人間の最期を描き、重層的な結末を描いたといえる。人間の運命を操ると考えられた運命の女神にどの程度人間が抗えるのか、という人間と運命のせめぎ合いを追及した中世の先人としてジョン・リドゲイトがいる。リドゲイトの『王侯の没落』、とりわけ「ト

ロイの書」がマロリーの作品に流れる思潮を支えているとしたら、マロリーのアーサー王はギリシャ・ローマの時代から中世イングランド王まで王権の盛衰を描いた「滅び行く王者」のひとりであり、『アーサーの死』は「トロイの書」に連なる「王国の滅亡譚であったといえるであろう」。

* 本稿は第七十六回日本文学会(二〇〇四年)で口頭発表した原稿をもとに加筆した。

1 リドゲイトのテキストは以下を使用した。*Lydgate's Fall of Princes*, ed. Henry Bergen(1924; London: EETS, 1967), ES 121, 122, 123, 124. *Lydgate's Troy Book, A.D. 1412-20*, ed. Henry Bergen (London: EETS, 1906), ES 97, 126.

2 Frederic Godefroy, *Dictionnaire de L'Ancienne Langue Françoise et de tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècle* (Paris: Librairie des Sciences et des Arts, 1938).

3 *Middle English Dictionary* (Ann Arbor: University of Michigan Press, [c 1952]-1997).

4 'Allas!' saide Balyn, 'all that maade an **unhappy knyght** in the castel, for he caused me to leve myn owne shelde to our bothe destruction. And yf I myght Iwe I wold destroye that castel for ylle

customers.” (90) ヲロリーのテキストは以下の版による。*The Works of Sir Thomas Malory*, ed. Eugène Vinaver, rev. P. J. C. Field (Oxford: Clarendon Press, 1990)。ヲロリーの引用は以下の翻訳にはは依拠するが、解釈の異なる箇所は適宜改訳した。中島邦男・小川睦子・遠藤幸子訳『完訳アーサー王物語』（青山社、一九九五年）、九五頁。本書は城の騎士がセイリント・ミランを殺害するために故意に盾を変更させたに解釈しているが、“to our bothe destruction”の箇所は目的ではなく結果を示す文型として解釈すべきと考え、改訳した。以降本文の引用は邦訳と原文のページ数を括弧で併記する。

5 “there shall never man handyll thys swerde but the beste kyght of the world, and that shall be sir Launcelot othir ellis Galahad, hys some. And Launcelot with [t]hys swerde shall sle the man in the world that he lovith beste: that shall be sir Gawayne.” (*Works*, 91).

9 “for than they be nat happy nother fortunate unto the werrys, for othir they shall be overcom with a sympler knyght than they be hemself, othir ellys they shall sle **by unhappy** and hir cursedesse bettir men than they be hemself. And so who that usyth paramours shall be **unhappy**, and all thyng **unhappy** that is aboute them.” (270–271)

7 “The damsel’s speech and Lancelot’s reply are among *M*’s most important additions to the Lancelot story.” (1420)

8 “And as they were unarmed, he smote them and wylt nat whom that he smote, and so **unhappely** they were slayne.” (1183) ㄴ

スロットが嘆く箇所は以下の通り。“I slewe never sir Gareth nother hys brother be my wyllynge, but alas that ever they were unarmed that **unhappy day**!” (1199)

6 *King Arthur’s Death: The Middle English Stanzaic Mortre Arthur and Alliterative Mortre Arthur*, ed. Larry D. Benson (1974; Exeter: University of Exeter Press, 1986), 1. 3340.

10 And kynge Arthur toke hys horse and seyde, “Alas, **this unhappy day**!” and so rode to hys party, and sir Mordred in lyke wyse. (1235)

11 『フランス中世文学集4 奇跡と愛』新倉俊一 神沢栄一 天沢退二郎訳（白水社、1996）二〇六頁

12 “Sir, late hym be,” seyde sir Lucan, “for he ys **unhappy**. And yf ye passe **this unhappy day** y[e] shall be ryght well revenged.” (1236).

13 Richard A. Wertime, “The Theme and Structure of the Stanzaic *Morte Arthur*” *PMLA* 87(5) (1972): 1075.

14 たふべぢシモン・ガナーのunhappyという語を使用しているが、たふべは多々ある。A *Concordance to John Gower’s Confessio Amantis*, ed. J.D. Pickles and J.L. Dawson (Cambridge: D. S. Brewer, c 1987). たふべはunhappyのCaxtonの語彙にはあるが、Proseの例として例を挙げたところから判断する限り明らかではない。⁹ A *Concordance to Caxton’s Own Prose*, ed. Kiyokazu Mizobata (Tokyo: Shohakusha, 1990).

15 Derek Pearsall, *John Lydgate* (Charlottesville: The University

Press of Virginia, 1970), pp. 140–143.

- 16 MED hap= chance or fortune considered as the cause or determiner of events

17 リドゲイトは木馬ではなく「真鍮の馬」となっている。p.746.

- 18 Ann F. Sutton, “Malory in Newgate: A New Document,” *Library: the Transactions of the Bibliographical Society*(Oxford), Seven Series, 1.3 (2000), 243–62.」の論文の存在をこの教示にたづいた高宮利行教授に感謝いたします。ニューゲイトの監獄の記録にマロリーの名はあるが、一時的な立会人として記録された可能性もあるこの指摘をビクター・フィールド教授から頂いた。

19 Works, xxvi.

- 20 John Withington, “The Arthurian Epitaph in Malory’s *Morte Darthur*” *Arthurian Literature* VII (1987), 103–144. ヲロリーの作品に引用されているトーマス王の墓碑は以下の通り。“Hic jacet Arturus, rex quondam rexque futurus.”

21 A.S.G. Edwards, “The Influence of Lydgate’s *Fall of Princes*, c. 1440–1559,” *Medieval Studies* (Toronto) 39 (1977): 424–439.

ヲロリーとの影響関係は論じよう。

22 Earl R. Anderson, “Malory’s ‘Fair Maid of Ascolat’,” *Neuphilologische Mitteilungen* 87(1986): 237–254.

- 23 *The Minor Poems of John Lydgate*, ed. Henry Noble MacCracken and text re-read by Merriam Sherwood, Part II (London: EETS, c.1961), p. 733: 267–79. ヲロリーが無意識あるいは意識的に

ドゲイトから表現上の恩恵を受けていた可能性は Snell も指摘している。William Snell, “A note on Malory and the ‘Justy month of May’,” 『大東学園専門学校紀要』第2号(昭和六十一年三月)、八〇—九〇頁。ヴィナーヴァーは rasure を忘却の意味で用いているが、リドゲイトの原詩と比較し原詩の意味を反映させるなら MED にある「かみそりのやう」に身を突き刺す冷たさの意味で解釈すべきであろう。

- 24 Pearsall, p. 125. 「トロイの書」は精巧な彩画や家紋が刻まれた写本が多く、「トロイの書」を所有することが家柄を誇示するようになったという。Lesley Lawton, “The Illustration of Late Medieval Secular Texts,” in *Manuscripts and readers in fifteenth-century England* (Cambridge: D.S. Brewer, 1983), p. 53, and p. 65.

25 William Caxton, *The Recuyell of the Histories of Troye written in French by Raoul Lefevre. Translated and printed by William Caxton, c. 1474*. Pearsall, pp. 126–127.

26 Edward D. Kennedy, “Malory and his English Sources,” in *Astpects of Malory*, ed. Toshiyuki Takamiya and Derek Brewer (Cambridge: D.S. Brewer, 1981), p. 30.

27 Helen Cooper, “Counter Romances,” in *The Long Fifteenth Century*, ed. Helen Cooper and Sally Mapstone (Oxford: Clarendon Press, 1997), p. 145.

28 Pearsall, p. 132.

29 運命の女神に関する考察は Howard Patch, 黒瀬保が詳しい。

- Howard R. Patch, *The Goddess Fortuna in Medieval Literature* (1927; New York, 1974). 黒瀬保『運命の女神 中世及びエリザベス朝文芸におけるその寓意研究』（南雲堂、一九七〇年）。
- Tamotsu Kurose, *Goddess Fortuna in John Lydgate's Works* (Tokyo: Sansendo, 1980).
- 30 Willard Farnham, *The Medieval Heritage of Elizabethan Tragedy* (Oxford: Basil Blackwell, 1956), p. 110—passim.
- 31 Jane Bliss, “Prophecy in the *Morte Darthur*,” *Arthuriana* 13 (1) (2003), 1—16.
- 32 *Works*, 1649.